

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2015 083



保田龍門 《少女》 1925(大正14) ブロンズ



保田春彦 《伝説》 1957(昭和32) 木

「保田龍門・保田春彦展」(2015.5.26-7.5) 覚え書き

名古屋市の《青春群像》と《平和堂》



展示中の作品

一昨年刊行された『保田龍門・保田春彦 往復書簡 1958-1965』(武蔵野美術大学出版局)は、保田春彦がヨーロッパ留学のため神戸港から出発した直後の葉書から始まる。それに続く龍門からの返信を読み始めすぐに泣いてしまったのは、その後、この親子が二度と会うことができなかったことを、話に聞いて知っていたからだろうか。いや、たぶんそれだけではない。ふたりの「思いの強さ」に当てられたようになつたのだ。

共に芸術家として歩む稀有な親子による濃密な書簡のやりとりは、ひとりの若者が彫刻家として地歩を固めていく道程をつぶさにあらわし、日本の近・現代彫刻史を縮図のように切り取って見せてくれる。

春彦が滞欧前の作品を自ら振り返った文がある。

「僕の二〇代は三つの恋愛に終わるで

しょう。考へてみれば自分の仕事もこの三つを転機として進んできました。那智の滝の清澄な初恋は、僕を「男子立像」の大きな制作に取り組ませました。そしてその恋の淡々とした別離は「青春群像」をつくらせ、それは感傷からの別離でもありました。ひらめきのないモデルとの痴人の愛は僕を気持ちがいのように分裂させ「習作F」「習作Q」等のあら削りな仕事に走らせました。そしてその自虐的結末は僕の仕事を育てる結果になりました。独り生活に徹し、島という特殊な環境に進んで入っていったからです。二ヶ年の世評にうとかった生活は、もくもくとして考へることを教え、「島」や「伝説」となって表れました。世評を避けていた生活は、却って世評を呼び、幸運に恵まれました。」(春彦より龍門あて 1958年5月6日)

父に恋愛体験を赤裸々に語るその関係にまず驚くが、ここで言及されている「習作F」「習作Q」「島」「伝説」(表紙右)は、いま当館所蔵となっており、今回の展覧会でも展示している作品である。気になるのは「男子立像」と「青春群像」だ。「青春群像」については、すぐ後の龍門の書簡にも出てくる。

「苅谷の日本陶管の試焼を見た。先ずあの大きな断片の焼成し得ることに自信がつく。色や釉も大体思ひ通りに行く見通しがついたので、これから引続キやらせる大壁面も先ずうまくゆくだらうと思ふ。グラウンドの仕事場も四週間目に来た。十三尺の立像が八分どこ出来てゐたのが、亀裂で脚のところが土が剥落、泣くに泣かれぬ惨憺たる状態だ。仕事の進捗がまた挫折だ。田淵氏助役辞任後、市との折衝に色々困難が出て來た。役人といふ連中のよくやる態度だ。君の「青春群像」は実によい機会におさまったと、今になって思ひ出される。」(龍門より春彦あて 1958年5月15日)

龍門は名古屋市の戦災復興のシンボルとして計画された「平和堂」のレリーフについて1951(昭和26)年に相談を受け、1956(昭和31)年から着手していた。この時は名古屋市内瑞穂の野球場に工房を仮設し制作していた。18万基もの墓を公園として名古屋市郊外にまとめるという他に類をみない都市計画で、牽引していた



fig.2 保田龍門《ささのおの命》1942(昭和17) 当館蔵

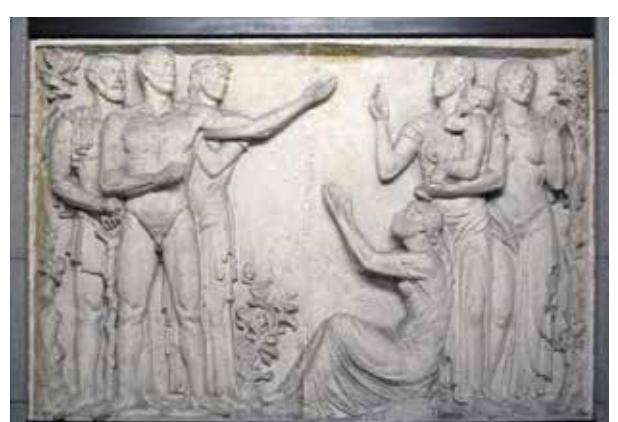


fig.3 保田春彦《青春群像》1954(昭和29) 名古屋市庁舎

のは名古屋市助役の田淵寿郎だった。田淵は1925(大正14)年頃に和歌山県の紀ノ川堰改修工事にも携わった土木技師で、戦前から龍門と交流があったと考えられる。田淵は紀ノ川堰改修工事の際に見つかった古いクスノキから観音像を彫ってもらい大事に持っていたというが、龍門の作品に、やはり紀ノ川から掘り起こされたクスノキで作った木彫《すさのおの命》(fig.2)があるのは、同じ木から作られたものかもしれない。こうした人物との縁で、《青春群像》は名古屋市に寄贈され、「実によい機会によい場所に」設置されたのだった。それは1954(昭和29)年の第39回院展に《群像》として入選した作品で、院展名古屋巡回展の後、運ばれたという。

1933(昭和8)年築で国登録有形文化財に指定されている名古屋市役所本庁舎に行くと、今もその作品を見る事ができる(fig.3)。一見すると龍門の作品と見紛うような構成の大作で、その堂々としたレリーフを弱冠24歳の若者が完成させたということに驚く。また春彦が父龍門の制作をどれほど観察し、影響を受け、才能を開花させようとしていたか、察せられる。この作品は、当時、龍門が勤めていた和歌山大学の教室で紀陽銀行本店のためのレリーフ(fig.4)を型どりしていた傍らで作ったものだという。龍門も息子の制作にどれほど大きな期待を寄せたことだろう。しかし意外にも、当時は東京美術学校での春彦の師、石井鶴三から「作るのが早すぎる」と注意を受けたという。早熟な才能が技巧に終始してしまわないよう注意を促したのだろうか。

平和堂は戦前に友好の印として中国から贈られた千手観音を祀る堂宇で、計画当初は仏教会からの寄付による設置が予定され、仏教寺院様式で造られたが、途中で市の事業に移って一宗教に偏ることが問題視されるところとなり、「平和の象徴」として周囲の理解を得るのに龍門の汎宗教的な表現が功を奏したらしい。

1964(昭和39)年、10年以上の歳月を経てようやく最後の石彫手直しの段階まで進んだ頃、龍門は長女の英子と共に名古屋市役所を訪れている。春彦は滞欱して7年目を迎え、パリで出会ったシルヴィ



fig.4 保田龍門 紀陽銀行本店のレリーフ 和歌山市

アとローマで結婚、ふたりの娘を授かり、彫刻家としての仕事も増え、個展の準備に忙しんでいた。

「英子に市役所の君の作品を見せた。僕の仕事よりよいらしい。奇蹟的に正面二階の中央二つの柱の中に完全におさまってゐて、採光電燈もいつもついてゐる。但し忙しそうな市役所内ではその前を素通りしてゆく。然しこれで父子二代の仕事はこの都市に残るわけで、因縁の不思議さ有難さである。」(龍門より春彦・シルヴィアあて 1964年4月17日)

龍門はその翌年2月に急逝してしまう。

73歳だった。『往復書簡集』は龍門の死を伝える家族からの書簡とそれへの返事で終わる。

その後、春彦氏は1968(昭和43)年に家族4人で帰国、シルヴィアさんと共に平和堂を訪れたという。

4月のある午前、名古屋市庁舎で《青春群像》を見た後、平和堂に向かってみた(fig.5)。何十万という墓と名古屋市街を見下ろす小高い山の上、塔の横のベンチでふたりの少年がパンをかじっている。颯爽と散歩する女性が一瞬立ち止まり、見上げるとまた歩き始めた。小鳥のさえずりだけが風と共に響いていた。

(井上芳子)



fig.5 保田龍門 《平和堂》 名古屋市

「リアルのリアルのリアルの」ワークショップ

3月14日から5月10日まで開催した「和歌山と関西の美術家たち リアルのリアルのリアルの」展は、和歌山県出身者を含めた関西で活躍する新進気鋭の作家5人の仕事を通して、現代における新しい美術の動向を紹介する展覧会でした。会期中、5月のゴールデンウィークに合わせ、出品作家によるワークショップを3回開催いたしましたので、ここでは講師を担当した3人の作家たちによるコメントとともに、その様子を紹介します。

5月3日「妄想暴走してまんねん」 講師：伊藤彩

伊藤さんの作品の魅力は、奇想天外なモチーフの組み合わせでありながらもなぜか現実味のあるしっかりとした画面構成にあります。ワークショップでは、その面白さを実感できるよう、以下の流れで行いました。

第1段階

伊藤さん作のストーリーを書いたテキスト4種類を伊藤さん本人が朗読。印刷したものも渡し、それを元に、参加者はそこに登場するキャラクターを想像して描く。

第2段階

事前に伊藤さんが制作したミニジオラマ（セットのようなもの）に、各自が作ったキャラクターを切り抜いて設置し、照明をあてながら参加者自身で構図を探りながら写真を撮る。伊藤さん持参のキャラクターも自由に組み合わせて使用可能とした。

第3段階

撮った写真をプリントし、それを元に絵を描く。

この一連の作業は、伊藤さん自身の「フォト・ドローイング」という制作方法とほぼ同じです。今回は参加者が想像を膨らませる発想源として、伊藤さんのテキストを用いました。

しかしこのテキストが、不思議なもの



や情景の組み合わせにあふれていて、絵にするのが難しい、しかしわくわくするような、クスッと笑ってしまうような内容でした。参加者は16歳から70代までと幅広い年代でしたが、それぞれがそのテキストに触発されて「妄想を暴走」させているようでした。伊藤さんにとっても初めてのワークショップ講師の機会となり、刺激を受けられたようです。

[伊藤彩さんからのコメント]

参加されたたちは、私の考えた文章（実は始まるギリギリ直前まで書いていたもの）をものすごく真剣に暖かく、聞いてくれました。もともと文章を書くことは苦手（絵を描くこと以外は全部苦手）で後回しにしていました。母以外に私の文章に意見を言ってくれることはなかったの

ですが、みなさんが私の書いた文章を楽しんで下さったのが、大きな自信となりました。

またこれまで、私はライブパフォーマンスのようなものが苦手で、自分には絶対できないと決めつけていました。ところが、ワークショップのために2つのジオラマを10人ほどのスタッフの目の前で作ることになり、やってみると楽しいなと感じました。今後もこういう機会があれば、できるかもしれませんと思いました。そしてみなさんが作った作品はどれも個性的で、「そうきたか！」と意表を突かれたり、「こんなこともしていいのか！」と驚かされたり、私の方が発見してばかりでした。このワークショップでの制作プロセス、新たに気付かされたたくさんのことを、これから制作にどんどん活かしていきたいです。



5月5日 「自然の造形を楽しもう」

講師：君平

協力：和歌山県立自然博物館

こどもの日に合わせて開催したワークショップは、小学生を対象としました。講師は、鉄による立体造形を手がけている君平さんです。今回の展覧会で君平さんは、花粉やプランクトンを大きく拡大した鉄の作品を発表されましたが、ワークショップにおいても、自然物を観察し、それを造形化することを提案されました。そして自然の観察作業では、和歌山県立自然博物館の協力を仰ぐことになりました。

当日は、まず同館学芸員の内藤麻子さんにタンポポの花の構造について解説をしていただきました。大きなモニターに映し出された白黒の電子顕微鏡写真と目の前の花粉を見比べたり、自分の目で顕微鏡を覗いたりしながら、実際に観察し、スケッチしました。

そのスケッチを元にカラフルな小麦粉粘土を使って立体的な造形を作るところからは、君平さんの出番です。手際よく粘土を丸めて、おもしろい形を作り出していく君平さんの手の動きに、子どもたちも保護者も目を見張りつつ、自分たちもやってみようと試行錯誤していました。何色と何色を混ぜれば思った色を出せるのか、台座の上に安定させるにはどうしたらいいのか、スタッフとして参加してくれた和歌山大学美術館部のメンバーも、楽しそうに子どもたちの手伝いをしていました。



理科と図工・美術が合体した内容に関心を深めつつ、参加した子どもたちは、こちらの想像を上回る造形物を作りあげ、最後の合評は多いに盛り上りました。そして展示室の君平さんの巨大な作品を実際に見て、驚きの声をあげていました。

[君平さんからのコメント]

私が展示した鉄の立体作品は、プランクトンや花粉をモチーフにしています。微細なモチーフを観察して造形する行為は、美しい色彩やユニークな形、自然科学の研究者や専門書など、魅力的なものや人との「出会い」をたくさん与えてくれます。

今回のワークショップでは、タンポポの花粉をモチーフに、このような「出会い」を子どもたちと共有したいと思い企画しました。顕微鏡の取り扱いやタンポポについての解説は、和歌山県立自然博物館に協力していただき、観察スケッチやカラー粘土による造形は私が担当することで、アートとサイエンスのコラボレーションによるワークショップが実現しました。

子どもたとは、造形的インスピレーションや知的好奇心を刺激する魅力的な体験ができたと思います。



5月6日 「空間をとらえなおす」 講師：岡田一郎

美術館のワークショップというと、先の2回のようになにかを作るという作業が一般的かもしれません。しかし最後に担当してもらった岡田さんは、なにも作らない、頭と体を使ったワークショップをしたいと提案されました。

岡田さんはご自身の作品制作においても、ふだん意識しない空間や時間についての認識を、改めて考えなおすことを主要なテーマとされており、その方法の一つが、自分の意識を拡張させる感覚でまわりの空間を捉えるというものです。作品として出来上がるものは、周囲の環境にどうやったら目を向けられるか、いろいろなアプローチをした試みの産物だとも言います。何かを作るのはではなく、空間に目を向ける「経験」をしてもらうことを目標としたのは、岡田さんらしいプランだと感じました。

とはいっても、目に見えない空間を捉えるのは、初めての者には簡単ではありません。そこで岡田さんは、事前に準備した音のサンプルから周囲の環境を想像したり、屋外の環境で空間の切り替わる場所を探すという課題を出したりして、徐々に周囲の空間に意識を向ける方法を示されました。参加者は、互いに意見を発表し合うなかで、さらに新しい発見をしていました。ワークショップが進む中で、だんだんと参加者の意識が研ぎすまされていったのではないでしょうか。

世界をとらえる主体を転換させるようなものの見方、感じ方はとても新鮮で、みなさんが美術館からの帰り道を、来た道とは違った感覚で歩いて帰られたのではないかと期待できる試みでした。

[岡田一郎さんからのコメント]

私たちは普段、どちらかというと形のあるものから身の回りを捉えることが多



いと思うのですが、今回は「空間」側から身の回りを捉え直すことの面白みを伝えられないかと考え、「空間をとらえなおす」というワークショップを企画しました。

「空間」を意識するには、音や風を意識することが鍵となります。ホールで私が用意した環境音などを用いて導入を行った後、美術館の敷地内で「空間が変化する場所」を探して発表してもらいました。

私は意識のチャンネルを変える切っ掛けを示しただけですが、参加者の皆さんには匂いや気温にも着目して、様々な「空間が変化する場所」を見つけてくださいました。参加者間の発見の連鎖も起きて、気付かされることがいくつもある、とても面白いものとなりました。

このワークショップで行った環境の捉え直しを、参加者の皆さんのが日常生活の中で思い出し、見慣れた環境が一瞬でも変化することがあれば幸いです。

美術館でワークショップをするということ

企画者としてワークショップの内容を考えるなかで、参加者に楽しんでもらうこと、満足してもらうこと、ワークショップを通じて知り、気づいてほしいことをどうすれば共存させられるのか、考えてきました。その背景には、ワークショップを単なる「工作教室」にしたくないという気持ちがあります。といっては語弊があるかもしれません、まず見本があって、先生が教えてくれる通りに真似をして作るのは、目的ではないということです。

そもそもワークショップとは何なのか。最近では各所で目にする言葉になっていますが、初めて耳にされたときには、ピンとこなかったのではないかでしょうか。美術のみならず、演劇や音楽、街づくり、商品開発の領域に至るまで、幅広い分野で行われているのですから、内容として一括りにすることは簡単ではありません。しかし数多く出ているワークショップについての研究を参考に簡単にまとめるなら、「そこでの活動を通して、新しい発見や気づきを得る場」と定義できるでしょう。もともとは「工房」という意味の英語であるワークショップですから、道具と手法を先導してくれる「親方」がいて、その中で自由に新しいものを作り出せる場のイメージもあります。

さて展覧会に関連して美術館でワークショップを行うにあたっては、第一に、作家の制作手法を通して、展示作品をより理解できることを目指しています。かといって、場所や費用、何より時間の制約もあり、作家と同じものを作れるわけではありませんし、先にも書いた通り、それが目的ではありません。ほんのわずかではありますが、作家の持っている制作方法のエッセンスを取り出して、そこに参加者が自由に作り出せる余白を十分に残しておくことが有効なのだと、今回はっきりと確信しました。そしてそれを作家と一緒に行うことで、作家自身にも反映される新しい発見が数多くあることを、今回3人の講師が身をもって示してくれたように思います。

(宮本久宣・青木加苗)

いつでもなにか準備中

「生誕110年 村井正誠展 ひとの居る場所」 2015.12.18 – 2016.2.14



村井正誠は1905(明治38)年生まれ、和歌山県新宮市で育った画家です。今年は生誕110年の節目にあたり、12月に回顧展「生誕110年 村井正誠展」を開きます。当館では、1979(昭和55)年と1995(平成7)年に大がかりな回顧展を開きました。74歳と90歳の時です。三度目の回顧展は、その間に収集してきたコレクションをあらためて紹介することになります。

村井は新宮で過ごした少年時代に、絵を描き、家具や衣服のデザインや家の設計をする多才な人で、のちに東京で文化学院を創立した西村伊作から大きな影響を受けました。伊作とその周りの人々が風景写生をするのを見て絵を描き始めた村井は、画家をめざして上京し、文化学院に新設された美術科で学んだのち、パリへ渡ります。

パリでは、モンドリアンらの幾何学抽象に出会い、博物館で見られる、原始から始まる西欧の美術史に感銘を受けて自らの作風を転換しました。帰国後は友人たちと集まったグループ「新時代洋画展」をほぼ毎月開催したのち、それを発展させて「自由美術家協会」を作り、戦後ふたたび友人たちと「モダンアート協会」を創立して、亡くなるまでそこで活動していました。画家として活躍する一方で、長く武蔵野美術大学や母校の文化学院で教えた人もあります。

戦前の、鮮やかに彩られた幾何学形態を画面に配した「URBAIN」シリーズが印象的で、日本の抽象絵画の先駆者として

高く評価されてきましたが、それ以外の側面も調査を進めるにつれてわかつてきました。そのひとつが、版画家としての仕事です。村井自身、油彩を制作の中心においてきましたし、大作が多い油彩画を中心とした展覧会では、これまで、どうしても版画は参考程度にとどまっていました。

村井の版画制作のはじまりは、文化学院の同級生たちと同人誌『シェル・ペントル』を創刊し、表紙や口絵、挿絵として自作の木版画を掲載したことです。村井が上京した大正末から昭和初期は創作版画運動が盛んになってきた頃でしたし、文化学院には創作版画運動のはじまりに、山本鼎の《漁夫》を、印刷技術としての版画ではなく、美術作品としての「刀画」と呼んだ石井柏亭が教えていました。

柏亭のほかにも創作版画を手がける先生たちがおり、山本鼎の《漁夫》を掲載した『明星』は、柏亭とともに文化学院の創立にかかわった与謝野寛・晶子夫妻が発行していました。自然に版画に親しめる恵まれた環境にいたと言えます。

パリへ渡ってからも村井の版画への関心は保たれており、エピナール版画やマティスのリトグラフを集めており、帰国後「新時代洋画展」を開いていたときには、より多くの人に手が届く良質な美術作品として、版画を出品し、注目を集めています。

戦後は自分で製版と印刷をおこなうばかりでなく、マティスなど、ヨーロッパの画家たちのように版画工房との共同作業をはじめました。こうして制作した版画は、多くの国際版画展に出品され、たびたび受賞しています。手がけた版種も木



《URBAIN No.1》1936(昭和11) 油彩



《風の中の除幕式》1968(昭和43) 油彩

版、銅版、石版、シルクスクリーンと幅広くなり、とくにシルクスクリーンを版画に取り入れた時期の早さには驚かされます。作風だけではなく、発表方法や、技法・自作から共同制作へといった制作スタイルの変化も、版画の歴史を反映して興味深いものです。

当館のコレクションにはおよそ190点の村井の版画があります。油彩画と平行して続けられた版画の制作は、油彩画で追求していたテーマを繰り返し取り上げて、よりよい形と色の構成を探る格好の方法でした。近年少しづつすすめてきた修復によって、より制作の意図がわかりやすくなった状態になった油彩画とともにご紹介できる、この冬の展覧会にご期待ください。

(植野比佐見)



《母と子》1956(昭和31)
シルクスクリーン



『近代孔版』表紙《海》1951(昭和26)
贋写版 孔版技術研究所製版・印刷



《風》1962(昭和37) 石版
第3回東京国際版画ビエンナーレ文部大臣賞

教育普及活動より 「美術館部」始動準備中！

前号に引き続き、発足準備中の和歌山大学「美術館部」についてご報告です。今年のゴールデンウィークは、今号でも大きく紹介した「リアル」の展ワークショップを実施しましたが、美術館部のメンバーも、会場準備から順次集まる参加者の受付、そして実際の作業のサポートまで、頼もしいスタッフとなって手伝ってくれました。特に小学生を対象とした君平さんのワークショップでは、各テーブルに美術館部が分かれて子どもたちの作業に目を配るなど、講師と美術館のスタッフだけでは決して手が回らないところまでサポートしてくれていたのが心強くありました。

また「リアル」の展の最終日5月10日



過去の「たまごせんせい」活動ビデオを見る説明会の様子

には、現在の部員たちが新メンバーを募るために当館での展示鑑賞会を企画し、引き続いて過去の活動内容の紹介や、現メンバーからの生の声を伝える説明会も実施しました。「忙しいときはマイペースで参加しても大丈夫」、「人前で話をする度胸がついた」、「私もまだうまくは話せないけれど、来館者と話す

のは楽しい」と、学生たちがそれぞれの言葉で新入部員(候補)に美術館での活動をアピールしてくれているのは、担当者として、とてもうれしい光景でした。そして他の美術館への見学や、これまでの資料作成など、新たなメンバーも加わっての活動が、早くもスタートしています。

(青木加苗)

Museum Calendar

なつやすみの美術館5 つぶやき おはなし ものがたり

7.14(火) - 8.30(日)

夏休み中の子どもたちが、美術に触れるきっかけを作ってきた展覧会。5回目となる今回は、言葉やおはなしを手がかりに、さまざまなジャンルを横断して紹介します。



コレクション展 2015-夏
6.10(水) - 9.10(木)
特集 くりかえしの美



ここだけの日本画 9.11(金) - 11.3(火・祝)

和歌山ゆかりの下村觀山、川端龍子、野長瀬晩花、稗田一穂らを中心に、同時代の画家の作品も交えて、日本の近現代美術を作り上げてきた日本画の魅力を紹介します。

生誕110年 村井正誠展 ひとの居る場所 12.18(金) - 2016.2.14(日)

和歌山県新宮市で育った画家、村井正誠(むらい・まさなり、1905~1999)。ひとが時代と場所を越えて繋がりあえる絵画を求めて、描き続けた生涯を回顧する展覧会です。

宇佐美圭司回顧展 2016.3.1(火) - 4.17(日)

和歌山市で少年時代を過ごした宇佐美圭司(うさみ・けいじ、1940~2012)は、人体を記号化した絵画で注目を集めました。没後3年を機に、アトリエに残された遺作を中心に、その画業を一望します。

コレクション展 2015-秋 9.19(土) - 12.6(日) 特集 生誕120年 逸見享

コレクション展 2015/2016-冬 12.23(水・祝) - 2016.3.13(日) 特集 光について

コレクション展 2016-春 2016.3.29(火) - 6月中旬(予定) 特集 贈書印刷工房から -印刷と美術のはざまで

第69回和歌山県美術展覧会 I 11.19(木) - 11.23(月) II 11.25(水) - 11.29(日) III 12.2(水) - 12.6(日)

newsがリニューアル



当館NEWSも83号を迎え、デザインをリニューアルしました。新館オープンの1994年から2000年の24号までの足掛け7年、そして25号から前号82号までは15年続きました。新デザインになっても、展覧会や収蔵作品に関連した記事や、日々の活動のさまざままで、変わらずお伝えします。

メールマガジン
Facebook
twitter
ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。またFacebookやtwitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

平成26年度友の会版画プレゼント&講演会

平成26年度友の会版画プレゼントは、銅版画家 舟田潤子さん制作の版画でした。会員のみなさんには、4種類の中から1点選んでいただき、お渡しました。2月28日(土)には舟田さんをお迎えし、当館2階ホール

で1時間ほどの講演会を開催、制作にまつわる様々なお話を伺いました。サークルをテーマにされている舟田さんらしく、会場はにぎやかに飾り付けられました。また講演会終了後、1階応接室で舟田さんを囲んで茶話

会を開きました。参加者の皆さんは、舟田さんオリジナルのトートバッグを購入したり、一緒に記念撮影をしたりして、終始和やかな雰囲気で楽しめました。(約50名参加)

友の会事務局 松原



友の会 入会のご案内

一般会員 6,000円 学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。

詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当: 松原

友の会 特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧(同伴者1名まで)
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
6. 版画の頒布会への参加

